

HPVワクチン（子宮頸がんワクチン） 接種後に私の身体に起こったこと



私はHPVワクチンを接種するまで、大きな病気もなく健康で楽しい日々を過ごしていました。

中学1年生の時、自治体からの子宮頸がんワクチンの案内が届きました。「子宮頸がんで亡くなる人が多い」という文言に不安になりました。国が勧めるから安全だろうと何の疑いもなく、ワクチンで将来がんから身を守れるならと接種しました。また、3回接種しなければ効果がないとも言われ、真面目に3回接種しました。



1回目2回目と打つごとに体調に変化がありました。3回目接種後には接種部位が大きく腫れ上がり発熱しました。その後、自宅、学校、時と場所関係なく突然キリで頭を刺されているかのような激しい頭痛、内臓がねじれているかと思うほどの腹痛、過呼吸、けいれんなどたくさんの症状が次々と私の身体を襲ってきました。今まで起こったことのない症状なので、かかりつけの病院に相談しました。思春期でもあることから様子をみましようとなり、私自身も中学卒業するころには元の元気な身体に戻っているだろうと思っていました。



結局体調は変わらないまま高校受験を迎え中学を卒業することになりました。高校受験は大学進学を希望していたので塾にも通っていました。担任の先生と塾の先生から特進クラスを勧められましたが、体調に自信がなかったことと、いつ襲ってくるかわからない症状に対して不安がおおきかったので普通科クラスを受験しました。



高校に入学出来ましたが、体調はさらに悪化しました。
特に記憶力が低下して、ノートいち面に漢字や英語のスペルを必死に書いて覚えようとしても頭の中には白いページしか残りませんでした。また、校内で移動教室の時に迷子になったり、朝から同じことを何度も話して、クラスメイトからも「同じ話ばかりしてるけど大丈夫なの？」と指摘されたり、お昼ごはんを食べること自体が理解できなくて、お母さんが作ってくれたお弁当を腐らせてしまうことも何度もありました。



人がわからない・・・

高校の教室で、ここがどこなのか、周りの人が誰なのかわからなくなり、私の様子がおかしいことに気づいた担任が、母へ連絡し、そのまま救急外来へ行くことも、しばしばありました。母から聞いた話では、母親のことを理解できず、失禁した状態で幼い子どものように大泣きすることもあったそうです。私にはその時の記憶はありません。

気が付いたら病院のベッドにいて、なんでここにいるのだろうという感じでした。

また、筋力低下もすすみ、高校2年生のときには杖をついての登校となりました。



杖をついて登校する様子

私の身体に何が起きているのか、原因を知るため、母と地元の病院を複数件まわりましたが、結局わかりませんでした。

程なくして、同じ被害に遭った同級生のお母さんから子宮頸がんワクチンによる副反応かもしれない、すぐに母子手帳を調べるよう言われました。

症状が悪化して病院へ頻繁に行くようになったのは接種後からだ気づき、自分の身体に起こった出来事の深刻さにとてもショックを受けました。

自治体に相談をして、沖縄県の協力医療機関である琉球大学医学部附属病院ペインクリニック科を受診しました。

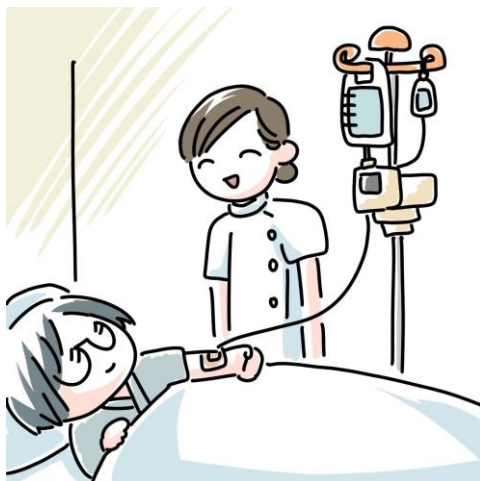
しかしそこでは、検査もせず、話もまともに聞いてくれませんでした。母が症状が深刻であることを説明して、検査のお願いをしたにもかかわらず取り合ってくれませんでした。

再度自治体へ行き、協力医療機関であったはずの病院の対応を話し、全国で多くの被害者を診察している県外の大学病院へ行くことにしました。様々な検査を行い、脳血流の低下、脳炎がみられ子宮頸がんワクチン接種後による副反応症状であると診断されました。この時点で接種後4年が過ぎていました。もっと早くに何らかの処置をしていればここまでひどい後遺症が残ることはなかったのではと思います。

そして約1800キロ離れた関東の大学病院に二か月に一度通うことになりました。現在も入退院を繰り返しています。



接種後から12年経ちましたが、
体調に波があるものの、今も身体中の激しい痛み、なん十キロもの鉛を背負っ
てるかのような倦怠感と息苦しさを感ずります。また、人と会話をしているも相
手の話す内容が理解できない認知機能低下などの症状を抱えています。
学ぶことも働くことも出来ず、簡単な移動すら自分ひとりで出来ません。
今現在も健康な身体とは言えません。



将来は美術関係の仕事に就きたいと考えて、日本の伝統文化や芸術が学べる大学に進学したいと思っていました。しかし、身体が思うように動かず選択肢の幅がどんどん減っていきました。同級生がそれぞれ進路に向かっていく中、私は病院でずっと治療に耐え、将来の夢は断たれたのかと悲しみました。

そしてそれ同等に辛かったのは家族にたくさんの迷惑をかけてしまったことです。

沖縄の離島から関東へ移動するための渡航費、病院への入院費や治療費は一般家庭が頻繁に出せる金額ではありません。また、妹は家族の様々な負担を減らすために島外の大学進学を諦め、通信大学へと進路変更しました。

それでも家族は私の痛みや苦しみが少しでも良くなるならと、懸命に支えてくれています。

今は障害年金や自治体の一部渡航費助成で負担が少し減りましたが、まだまだ自己負担額がかかる状況にあります。

薬害は被害に遭った本人だけでなく家族にも影響を及ぼします。

ワクチン接種で明るい未来が待っていたはずなのに、
わたしにとって、ただただ辛い症状に耐える日々を過ごすだけのワクチンとなっ
てしまいました。

治療法も確立されず、何の保証もないまま置き去りにされている被害者が多くい
るにも関わらず、国は2022年4月から積極的勧奨を再開しました。
そして悲しいことに新たな被害者を出してしまいました。

ワクチンに対する思いや考えはそれぞれです。
私には打ちたい人を止める権利もありません。
ただ、接種後に被害に遭った当事者だからこそ伝えられるものがあると思います。
リアルな話を聞いて、少しでもワクチン接種を考えるきっかけになればと思います。

本日はお話を聞いて下さり
ありがとうございました。

